翻　訳

王友琴[1]1998 － 2004 論文 5 篇[2] の日本語訳

佐竹　保子（大東文化大学外国語学部）

Japanese Translation of Wang Youqin's Research Papers from 1998 to 2004

Yasuko SATAKE

Ⅰ　時代の証拠を留めた人に感謝する〔1998 年〕[3]
――恵文氏の「困難期 3 年間の全社の記録」を読んで

私は、インターネットサイト「中国大飢饉擋案館」の主宰者が、かくも多くの資料を集め、中国現代史の悲惨で放縦な時代を記録していることに、敬服している。恵文氏の「困難期 3 年間の全社の記録」は、このサイトの最新資料だ。このファイルはサイトに重要な内容を増し加えた。その上これは、時代のために証拠を留めるという見本を示していることも、指摘しておきい。

数年前、あるアメリカ人学者がとても真剣に私に言った。中国では、若い世代が上の世代のことをほとんど理解していないのではないか、と。彼女はいぶかしみつつ問うた。「中国人はふつう、自分たちの切実な経験を若い世代に話してあげないの？」。

私は、それは以下のような事情によると思った。

私は自分が文革の歴史を研究しているので、多くの文革経験者にインタヴューしている。私の基

[1] 王友琴氏は、もと Chicago 大学東亜語言文化系中文教研室主任教授。1982 年北京大学卒業、1988 年中国社会科学院研究生院にて博士学位取得。王氏は長年にわたり、1000 人以上の文革被害者やその関係者へのインタヴューを続け、800 名以上の被害者の名前と被害状況を明らかにしてきた。著書に『文革受难者』『鲁迅和中国现代文化震动』等。中国語及び英語の論文に「1966：学生打老师的革命」「文革斗争会」等多数。王氏の経歴や仕事の詳細は、注 2 所掲『血と涙の大地の記憶』所収「自己紹介」を参照。王氏は訳者が 1981 ～ 1983 年に北京大学に留学していた当時の " 同学 " でもある。

[2] 以下は、王友琴氏が 1998 年から 2004 年まで、「文革受难者纪念园」（www.chinese-memorial.org）に発表した論文のうち 5 篇（本文中のⅠ～Ⅴ）の、初の日本語訳である。王氏の論文は、その一部が日訳されて『血と涙の大地の記憶』（王友琴著、小林一美・佐竹保子・土屋紀義・多田狷介訳。集広舎、2023 年）に収められているが、本稿はそこに未収録の早期の作を訳している。なおⅠ篇目は「中国大飢荒擋案館」web サイトに、Ⅳ篇目は雑誌『開放』2003 年 9 月号に、Ⅴ篇目は同 2004 年 10 月号にも掲載されている。

[3] 以下の〔　〕は訳者が付加。

本的な方法は、できるだけ文字記録にたよらずに事実を調査する手だてを講じることだ。文革受難者には中高や小学校の教員が多く、彼らは文革中に「つるしあげ」られ、命を落としている〔有名人ではない彼らの場合、その受難が公式の文字記録にほとんど残っておらず、そのため関係者への地道なインタヴューを主な資料源とせざるを得ないことを言っている。本篇末尾や「Ⅱ　李潔さんの死への懺悔」の冒頭部分を参照〕。

1996 年、私は北京大学のある教師をインタヴューした。1966 年に文革が始まった時、彼は大学生だった。彼はこころよく私のインタヴューに応じ、談話の録音と録画まで許してくれた。後者はインタヴュイーには珍しいことだ。

文革の話、とりわけ文革受難者の話は、もとより気楽で愉快な話題ではない。その先生が語りつづけて 1 時間後、話題がふいに大飢饉の時代に転じた。彼は私に、自分は安徽省の農村出身だ、と言った。「3 年間の困難期」に、彼の両親は餓死した。父は 1960 年に、母は 1961 年の春節〔旧正月〕に。彼の村では村民の 3 分の 1 が餓死した。村の同年齢の子供で中学に進学しなかった者はほとんどが死んだ。彼は 1960 年に県の中学の寄宿生となり、学校が生徒の食事をまかなっていたので、餓死しなかった。当時道ばたには餓死者の死体が横たわり、まだ息のある人もいたが、他の人々は飢えきっていて助ける力もなかった。

聴いていた私は、目を見はりあっけにとられた。想像もしがたかった、穀物やその他の食物を生産する農村で、かくもおおぜいがむざむざと餓死するなんて。だが、これは事実だ。誰も私に告げなかったので、私が知らなかっただけなのだ。実際このことは、私の書いた文革の暴力迫害と受難者の事件を読む人々が、ひどく驚き、聞いたこともないと思うのと、よく似ていた。政府の審査を経て発表を許される文章は、そうした事実にほとんど、あるいはまったく、触れていないからだ。

その先生の実家は、安徽省の全椒県だった。『儒林外史』を書いた呉敬梓が全椒県の人だと文学史にあるので、この地名を私は知っていた。呉敬梓は 18 世紀の作家だが、しかし全椒県で 40 年前におきた恐るべき飢饉を、そのわずか数年後におきた文革の歴史を書こうとしているこの私が、まったく知らなかったのだ。

これは歴史記述の落とし穴だ。多くの重要な事柄が、書き漏らされている！

全椒県の飢饉の話を聞いて、文革は残酷だがこの飢饉にくらべればましだとさえ、私には思えた。大勢の農民をむざむざと餓死させるとは、あまりに残酷で凶悪だからだ。同時にこの話で、私は文革をより深く理解した。文革時代、被迫害者たちはほとんどだれも反抗しなかった。彼らはさまざまな非人間的虐待に耐え、死んでいった。文革のこの点が、後世の人にはいぶかしい。けれども飢饉の時代の状況を見れば、むざむざ餓死させられてさえ反抗できなかったのだから、ましてほかの迫害は言うまでもないのだ。

私はいつも、文革の調査を終えたら、文革前におこった社会的歴史的な事件を調べたいと願っている。歴史をさらに深く理解するため、またそこから文革の起源を探り出すために。けれども第 1 の調査が終わらないので、第 2 の調査も本格的に始めることができないでいる。

いま「中国大飢饉擋案館」サイトで恵文氏の「困難期 3 年間の全社の記録」を読み、とても喜ん

でいる。ここで我々は、明確で明晰な記録を見ることができる。ここから我々は、飢饉の深刻さと人死にのおきた状況を理解できる。恵文氏は、農民の中には死人の肉を食べた人もいると書いている。「人が人を食う」とは当時比喩ではなく、現実のスキャンダルだった。彼は事実を通して飢饉のおきた原因をも書いている。たとえば、省委員会の書記が 2 万元のガラスを大量購入して温室を建て「棉花王」を守ろうとした。だがそれは棉花の生産量増大には何の役にも立たず、2 万元でもし輸入品の小麦を買っていたなら餓死寸前の人々をかなり救えたはずだ、と。

恵文氏のファイルは、この痛ましい歴史を理解する助けとなるのみならず、経験者が大飢饉を公式に記録するという新たな方向をも開いている。

恵文氏のファイルは、既存の文字記録だけを用いた研究とは違い、彼自身の観察と体験を含んでおり、とくに政府の厳しいメディア統制下では、こうした自身の観察と体験はきわめて重要だ。彼のファイルは一般の随想風の文章とも違い、事件発生のはっきりした日時・場所・経過を記していて、そのことが叙述を堅実で信頼できるものとしている。

こうした歴史を書くのは非常に重苦しく非常につらいことを、私は知っている。花鳥風月の描写や、大言壮語の談話、私的な欲情の吐露にくらべれば、中国の文革や飢饉等の痛ましい歴史を叙述するのは、心理と感情をひどく痛めつける仕事だ。しかも「上」が文革や飢饉などの記載を厳しく統制しているから、作者はその方面の圧力と恐怖も覚悟せねばならない。

けれども恵文氏はやってのけた。彼には深甚な感謝と敬意を表したい。そして彼の同時代の人々が彼のように、後人のために時代の記録と証拠を提供することを望む。

Ⅱ　李潔さんの死への懺悔〔2000 年〕

私は関秋蘭先生に深く感謝したい。彼女の懺悔に。その懺悔で私がとても励まされたことに。

文革史の研究が容易ではなく、多大な苦心と労力を要するだろうとは、最初から分かっていたことだ。けれどもこの研究がかくも心理的な苦痛をもたらすとは、思いもよらなかった。それははっきりした「痛み」や「苦しみ」ではないから「苦痛」という語は当たらないかもしれないが、しかし書いている時も書いた後も、私は圧迫感と憂鬱に陥った。

私の研究方法は、当時の文字資料や写真資料をあたう限り集めた上で、数百名の文革経験者たちにインタヴューすることだ。なぜなら文革の多くの事実、とりわけ普通の人民の遭遇は、記録や報告が残っておらず、だからこそ調査が必要だと思い続けてきたからだ。ありがたいことに、多くのインタヴュイーが貴重な時間をさいて文革を思い出し検証を助けてくれた。彼らが語り、それを私が整理し、1 人 1 人の遭遇と 1 つ 1 つの事件を記録していった。たとえば北京大学附属中高、そこは紅衛兵運動発生の地の 1 つであり、関秋蘭先生が 40 年間教鞭をとった学校であるが、私はそこに、いまだ告げられたことのない次のような事件を見出した。

1966 年の夏、副校長で化学の先生の劉美徳が「反党反社会主義」の「黒帮分子」とされた。彼

女は髪を切られ丸坊主にされた。腕ほどの太さの棍棒が折れてしまうほど、殴られた。当時劉美徳は妊娠数ヶ月で、それは誰の目にも分かった。ある日「北京日報」の記者が取材に来て写真を撮った。紅衛兵は机を用意し、その上に劉美徳を跪かせた。1 人が彼女の後ろに立ち、片足で劉美徳の背中を踏みつけた。いわゆる「階級敵」を「地面に打ちのめし、さらに片足で踏みしだく」ポーズをとって、記者に写真を撮らせたのだ。撮りおえると、劉美徳の後ろに立っていたその紅衛兵が、彼女を机から床に蹴りおとした。

もう 1 つ。北京大学附属中高は 1966 年に、「親父が英雄なら子は好漢、親父が反動なら子はろくでなし」という対聯を発明した。中学 1 年の万紅という女子生徒は、父親が 1957 年に「右派分子」とされ、そのため「ろくでなし」となった。クラスの男子紅衛兵たちに殴られそうになったとき、彼女は女子トイレに逃れた。紅衛兵リーダーの 1 人である彭小蒙も女子トイレにいた。万紅は彭小蒙に、「毛主席があなたに接見したから、あなたは政策を知っているでしょ、彼らに殴らないように言ってください」と頼んだが、彭小蒙は彼女をトイレから引きずり出した。万紅は腰かけに立たせられ、つるしあげられた。ある同級生は銅バックルの革ベルトで彼女を打ち、別の同級生は腰かけを彼女の足の下から引きだして、彼女をしたたかにコンクリートの床に叩きつけた。

さらにもう 1 つ。1966 年 8 月 27 日、「四旧を打破する」運動の最中に、北京大学近くに住む労働者の陳彦栄と妻の劉万才が、北京大学附属中高の紅衛兵に家捜しされ、力づくで学校に連行されてめった打ちにあった。陳彦栄はその日の夜中に殺され、享年 37 歳だった。妻は殴られて体じゅう傷だらけになった。同じ日にもう 1 人年配の女性が殺されていた。陳の死体は火葬場に送られて灰も残らず、陳家に 28 元の火葬代を払えとの通知が来ただけだった。陳家は火葬代を借金した。陳の六人の子供たちはまだ未成年で、以後の生活の苦しさは推して知るべしだ。文革後、中共北大附属中高支部は陳家に 2500 元を賠償した。金を受け取った陳の妻は、声をあげて泣いた。「こんな大金、生まれてから見たことがない。でもお金でどうしろというの？ 欲しいのは人なのよ」。

30 年来、殴った者はだれも、上記 3 名の被害者やその家族に謝罪していない。

紙の上に、あるいはキーボードで、私はこうした文革の話を記録してきた。歴史を書く者に、これらの話は絶対に真実で重みがある。けれどもこれらの話は、身をもって体験したのではなくとも記録するだけで人を苦しませる。これらを書くと、私の心は暗く沈んでしまう。

万紅の同級生をインタヴューした時、万紅がいかに虐待されていたかを彼女が語りだすと、かたわらで聞いていた彼女の 15 歳の娘が、耐えきれずに泣きだした。私は泣くことができなかったが、しかし、人間性の暗黒を見た鬱屈から長いこと立ち直れなかった。

私の文革研究を支えてくれていた友は、この時から私を心配し、しきりに言うようになった。ああ、どうしてこんな話を書くの？ これはあなたを傷つけるのに。

彼女の気遣いと好意には心から感謝する。しかし、こうした話が見えない鉄のヤスリのようにいつも耐えがたく魂を摩耗させようとも[4]、始めてしまったものはやり続けねばならない。幸いにも、こうした調査は単純のように見えて実は非常に時間と労力を消耗するので、調査がいつも私の頭をいっぱいにし注意力をそちらにそらしてくれる。またこうした時、調査に関係はあるが全然違う事

柄を自分に思い出させるようにしており、その 1 つが、関秋蘭先生の懺悔なのである。

1997 年夏の北京で、ある人が私に言った。北京大学附属中高の関秋蘭先生があなたの書いた「1966：生徒が先生を殴った革命」[5] を読んであなたと話したがっているよ、と。もとより歓迎だった。80 年代初めに北京大学の学生だった頃、私は関秋蘭先生の名前を耳にしていた。当時彼女は模範的な中高教師として有名で、生徒たちは彼女が大好きでとても尊敬しているということだった。90 年代後半に会った時、彼女はすでに退職していたが、しかしなお民営の職業高校の校長を務めていた。むろんもう若くはなかったが、しかしとても生き生きと、動きは機敏、話は率直、思考は明晰だった。

私たちが会った日は蒸し暑かった。こんな暑い日に、高齢のかたが労苦を厭わず約束通り会いに来てくれたことに、私はとても感動した。関先生は幼少時インドネシアで育ち、1949 年北京に来て中学に入り、その後北京大学歴史学部に進学した。父上はインドネシア華僑で、先生をしていた。彼女も卒業後は「太陽の下もっとも神聖な教育という仕事」に献身したいと願っていた。国外出身の彼女は、文革前は「任用抑制」の部類に区分けされていた。文革が始まると、北大附属中高の「労改隊」、別名「牛鬼蛇神隊」に入れられた。1966 年 8 月、北大附属中高には 3 つの「労改隊」があった。いわゆる「罪行」の「重さ」によって分けられたものだ。関先生は「労改二隊」だった。「労改二隊」には 12 名の教職員がいた。ほかの 2 つの「隊」には 10 数人がいた。

関先生の話では、「労改二隊」に李潔という名の女子職員がいた。私〔王友琴〕は前にこの名を聞いたことがあり、彼女が文革中に殺されたことは知っていたが、詳しい事情は知らなかった。

関先生によれば、李潔は若い頃親の決めた結婚から逃れようと家出して北京に来たと、そう自分に話してくれた、と。それは日本軍が北京を占領していた頃で、李潔は日本人男性と同棲した。その後男性は去り、2 人の間の子供も死んだ。李潔は 50 年代初めの「反革命を粛清する運動」の時、こうした過去を「自白」し、当局も彼女に「結論」を出した。以後彼女は北大附属中高で図書資料の管理と一般職員の事務に携わった。文革が始まった。李潔の過去がおおっぴらになった。1966 年夏、李潔はめった打ちにあった。紅衛兵の生徒は彼女を引き出しの中に跪かせ、身動きできない彼女を火かき棒で殴った。李潔の持ち物を調べ、家族の墓地文書を見つけ出し、彼女を殴った者が言い張った。これは農地の「売買契約書」で、「変天帳」〔革命で打倒された人が革命が失敗して再び世の中が変わる時のためにひそかに保存している土地証書や財産目録〕だ、――保存して「変天」〔世の中が一変する〕の時を待っているのだ、と。彼女はほとんど殺されかけた。2 年後の 1968 年 9 月、「階級隊伍を整理する」運動で、李潔は再度生徒にめった打ちにされた。学校当局が死にかけ

[4] 私事になって恐縮だが、訳者は 2017 年に王友琴の論文 1 本を初めて日訳し（「日記を壊した革命　王友琴著」、『東北大学文学研究科研究年報』66）、2023 年に彼女の複数の論文を日訳しており（注 2 所掲『血と涙の大地の記憶』所収）、翻訳していてさえ、その内容のあまりの凄惨さに体調不良を免れなかった。ましてそれらを調査し、記録し、論として綴り、校正してきた王氏がどうであったか、察するにあまりある。

[5] 注 2 所掲『血と涙の大地の記憶』所収。

ていると見て海淀医院に送り、彼女はそこで死んだ。医院の死亡診断書は「脾臓破裂」だった。

関先生は言った。私たち「労改二隊」の 12 人は、「労働改造」された上、殴られ侮辱されました。1966 年 10 月、私はこっそり北京市内の「国務院群衆来訪接待センター」に行きました。当時の文革の政策に照らせば私たちは「実権派」でも「反動学術権威」でもなく、当時の「運動対象」に該当しないから、「労改二隊」をこのように扱うべきではない、と思ったためです。係員に、自分が国外から帰国した経緯を話し、その文書資料も手渡しました、と。

「提訴」しに行ったために、次の日、北大附属中高の「紅旗」紅衛兵リーダーは、関先生を叱責した。彼らは 1966 年のいわゆる「紅い八月」を経て「紅」さも極まっていた。8 月 1 日、毛沢東は手紙で彼らを支持した上、彼らの指導者の 1 人である彭小蒙を特に名指しした。毛の妻の江青は彼らを「小太陽」と呼んだ。彭小蒙は天安門の城楼で演説し、全国に実況放送された。だがその後、文革の攻撃目標がさらに拡大すると、彼らはしだいに勢力を失った。文革後彭小蒙は、新聞に発表した文章で自分が迫害を受けたと書いたが、しかし彼女らがほかの人々――北大附属中高の先生や同級生、さらには校外の無抵抗な住民たちを、いかに残酷に殺害したかには一言も触れなかった。

関先生は私に言った。私が「国務院接待センター」に行ったあの時、「労改二隊」のほかの人のことも「反映」（これは当時、上級の権力機関に何かを上申する際用いた動詞）〔具申すること〕しました。でも、李潔のことだけ言いませんでした。李潔のために何も言いませんでした。後に私は「労改二隊」から出たけれど、李潔は「労改一隊」に入り、その後殺されました。関先生は内心の呵責を感じていた。

私は言った。たとえ「国務院接待センター」で李潔のことを「反映」していたとしても、役に立つはずもなく、逆効果だった可能性さえあります。私が調査した受難者のある先生、北京師範大学附属女子中高の胡秀正先生は、1966 年夏に迫害を受け、その迫害が当時の「政策」に合わないものだったので、彼女は「接待センター」に行って「反映」し、書面資料も手渡しました。結果、それがかえって新たな「罪行」となり、「文化革命をくつがえす事案」とされました。「文化革命をくつがえす事案」は当時「現行反革命罪」に当たりました。胡先生は 1968 年にそのために「隔離審査」され、学校に監禁されて飛び降り自殺しました、と。これは本当の話で、決して関先生を慰めるためにでっちあげたのではない。

だが関先生は、私のようには考えなかった。彼女は言った。文革が終わってから李潔の妹に会いに行き、彼女のために何かしたいと思いました。でも 1966 年には、李潔のために何も言わなかった。表面だけ見れば、私が当時、自分とほかの「労改二隊」はみな「問題がない」が、李潔は日本占領時に日本人と結婚したから「問題がある」と思っていた、ということになります。

関先生は言った。私は事実李潔の「問題」を知っていました。人は皆あやまちを犯します。自分は犯さないと誰に言えましょう。20 年も前のことで、どうして彼女を「労改隊」に入れられるの、どうしてあんなに野蛮に彼女を拷問できるの？

関先生は言った。私は李潔を殴ってはならないと知っていた、でも言わなかった、彼女を殺させたのよ。

「私は彼女に申し訳ない」と、関先生は私に言った。

これは文革の罪で、個人のあやまちではない、と私は彼女に言おうとした。だが言えなかった。そんなこと、彼女は分かっていると思った。彼女が言っているのは別のことなのだ。

ふいに『聖書』のある話を思い出した。人々が 1 人の娼婦を石で打ち殺そうとした時、イエスが「あなたがたの中で罪なき者が、石を投げなさい」と言った。すると、すべての人が石を棄てて去った。この話は深い意味をもっており、ここで単純に李潔のことになぞらえようとしているのではない。

文革中、多くの事件が次のように起こった。まず「問題のある」人を決め、その後みんながその人を「告発」し「つるしあげ」、彼女に石を投げるか、あるいは他人が彼女を打ち殺すのを平気で見ていた。文革後少なからぬ人々が、自分たちが他者への迫害に加わったのは「革命の理想」を抱いていたからだと主張し、それを理由として、謝らず反省せず懺悔もしなかった。内心の緊張と良心の呵責を、彼らは感じない。

別れる前、関先生は自身の人生観と道徳観を語りだした。身心ともにすこやかに見えるこの老先生が、うちにとても熱く鋭い道徳への希求を持っていることを、私は即座に感じた。彼女に深く刻まれている文革の記憶、他者の苦痛への共感、自己分析の明晰さ、わが行いへの懺悔。それらは皆この道徳への希求と関わっている。

上記 4 つのたしかな結びつきを、私は別の人にも見いだしたことがある。その 1 人が、すでに逝去した作家の王小波だ。はじめて彼と話した時、私が文革の歴史を研究し文革の殉難者を探していると聞くや、彼はすぐさま彼の学校、北京二竜路中高のことを語りだした。張放という女性の先生が、1966 年に紅衛兵にめった打ちにされ、1968 年の「階級隊伍を整理する運動」でも「審査」されて自殺したというのだ。彼の記憶はとてもはっきりしており、口調は同情に満ち、私が事実を明らかにするのを手伝う責任があると思っていた。明らかに同年齢の他の作家たちとは違っていた。

文革について事実を語り、過ちを認め、被害者に謝り、そして自分の行ったことを懺悔する、これらはどれも重要なことだ。これらは相互に関わっているが、しかしそのレベルに違いもある。懺悔は、道徳の境界線だ。この線の内側に居ない人には、それが何かを体得しがたい。あまり適切でない比喩を使えば、「内部メモリ」の乏しいコンピュータに高級なソフトを扱えないようなものだ。

残念にもこの点について、関先生と多くを語る機会は持てなかった。しかしその後、パソコンや原稿に文革の事件を少しずつ書いていく日々の中で、圧迫感や憂鬱を依然感じながらも、あの炎天下の午後に、関秋蘭先生が語ったことをいつも思い出す。もがきつつ善意に向かおうとする人間性の力を、彼女は私に見せてくれた。彼女の懺悔は、私の勇気と信念を強めてくれる。

ありがとうございます、関先生。

2000 年 6 月 3 日

Ⅲ　邪悪への直面　2001 年 9 月 12 日〔2001 年〕

文革中に労働改造所で死んだ老医師のことを書いていると、テレビがニューヨーク世界貿易センターとペンタゴンで起きた惨劇を放映した。私のデスクのうしろのテレビは 2 日間つけっぱなしになった。テレビはずっと、現場から実況中継した。私は驚きと怒りを抑えられなかった。

この時廃墟に埋もれた人々のために、殺人犯を探すためにも、自分が何もできはしないことは分かっていた。しかしある 1 つのこと、つまりこの惨劇の背後の意味を考えることは、できるかもしれないと思った。

数千、実際には数万かもしれない人々の身体が、倒壊した重い鉄とコンクリートの下に埋もれている。私たち同様生き生きと暮らしていた彼らが、一瞬にして押しつぶされ殺されたのだ。下手人とは何の面識もないのに、どうして殺されねばならなかったのか？

白く美しいビルが瓦礫の山に変わった。ビルはもともと人類の文明の象徴で、科学技術の成果だ。ビルには何の怨みもないはずなのに、なぜ破壊されねばならなかったのか？

透徹した答えの得がたい問いだが、しかしある意味、答えは難しくない。私は文革中におきた数百件の死を調査し、受難者の生前と死亡経過をあたう限りくわしく理解し記録してきた。受難者たちは教師、医師、労働者、学生で、彼らは何の罪も犯しておらず、文革の指導者たちとはいかなる衝突もなかったのに、むざむざと殺され、あるいは虐待のすえに自殺した。私は問うた、なぜ彼らを殺したのか、と。

惨劇を聞いた時ちょうど書いていた文革受難者の老医師は、1957 年に「右派分子」に区分けされ、文革で「つるしあげ」られた。その後やはり医師である義兄〔妻の兄〕が、彼の中学生の娘を連れて中国から、文革から逃れようとし、不幸にも捕まった。義兄は死刑となり、娘は禁錮 10 年に処せられた。老医師は、義兄らが「祖国を裏切り敵に投降する」のを支持したと訴えられ、禁錮 15 年に処せられた。4 年後彼は、労働改造所で死んだ。

何年も前、私は「1966：生徒が先生を殴った革命」[6] という一文を書き、教育従事者が生徒の紅衛兵に、いかに虐待侮辱されむざむざと殺されるに至ったかを報告した。毛沢東が 10 代の紅衛兵生徒を使って先生を殴打し殴殺したのは、残酷であるばかりか邪悪だ、と文中に書いた。だが編集者が「邪悪」の 2 字を削った。文革が終わってすでに 20 年経っていたけれども。

人の生命や人類の物質的精神的な労働の成果に対する何はばかることない破壊を、「邪悪」と言わずして何と言えばいいのか？ 文革中に、また 9 月 11 日の惨劇のうちに体現されたのは、こうした邪悪にほかならない。

こうした邪悪は人類史に出現してすでに久しく、地震や台風や伝染病のように人類全体を脅かしている。我々は邪悪には弱く無力で、拙文中の「邪悪」を削ったあの編集者のように、邪悪の存在すら認め得ない時があるからだ。いま邪悪はふたたび、かくもおおがかりに我々を襲っており、我々

[6] 注 2 所掲『血と涙の大地の記憶』所収。

は邪悪の存在と発生について真剣に考え、それを押し止める方法を探さねばならない。

Ⅳ　受難者の削除は文革の美化を招く〔2003 年〕

金鐘氏が手紙で、海外の文革研究の状況を語る短文を書かないかと問い合わせてきた。私は喜んで応じた。学術論文では冒頭に、先人の仕事の概況と評論を置く。この形はたしかに筋が通っている。研究という仕事は独りよがりにならず、1 人 1 人の努力を通してこそ、協力して知識を積みあげ進歩できるものだからだ。私の文革研究はおもに第 1 次資料の調査と分析だが、しかしいつも、あたう限り見落としなく、他の人の書いた関連著述を読んでいる。

1. 受難者を文革史の授業で扱う

1996 年、私は香港科技大学に行き、文革 20 周年学術討論会に参加した。参会者は 12 名で、世界各地からやってきた。私の参加論文は「生徒が先生を殴った革命：1966 年の革命」[7] だった。会議で初めて、ハーバード大学の歴史と政治学の教授で、上品で穏やかな先達であるマクファーカー〔MacFarquhar〕氏に出会った。彼は、私の文章を彼の文革の授業の教科書に組み入れたいと申し出た。

私の文章の主な拠り所は、数百名の文革経験者との対話だった。拙文は、1966 年における紅衛兵の暴力の発生と経過、および暴力や虐待で用いられたさまざまな方法を叙述し、調査の及んだ 85 の学校名と、1966 年にそこで紅衛兵の生徒に殺された 14 名の教育従事者の名前、さらには殴られ虐待されたすえに自殺した人々の名前をつらねていた。

拙文はかなり長い。字を小さくし行間をせばめても、標準タイプ紙で 22 頁ある。1997 年から今まで、拙文はマクファーカー教授の授業の教科書に使われ続けた。ハーバード大学でこの授業を選ぶ学生は、1997 年には 379 人だった。それより多い時もあったという。授業は、教授の講義と小グループの討論との組み合わせだ。グループ討論は大学院生の助手が指導したが、受講生が増えて多くの助手を必要としたので、助手たちをまとめる「助手長」という特別な肩書きまで設けられた。

この点は中国の教授たちを羨望させ、また気落ちさせた。こうした授業が中国の大学でも開かれるべきだったからだ。だがいまだに、中国の学校にこの授業は無い。北京大学の趙宝煦教授が私に言うには、彼はずっと北大で文革の授業を開きたかったが、しかし大学院生相手の小規模な授業が一学期間許されただけで、その後はもう開かれないだろう、と。

マクファーカー教授は『文革の起源』を書いており、当時すでに 2 巻が出て、中国語の訳書も出版され、第 3 巻が完成したばかりだった。彼は、故費正清教授とともに『ケンブリッジ中国史』第 15 巻、すなわち文革に関わる『中国内部の革命：1966 － 1982』を執筆編輯していた。この本は

[7] 注 2 所掲『血と涙の大地の記憶』所収。

1991 年に出版されていた。

すでに気づいていたことだが、文革に関するこうした英文の著述には、拙文の書いた内容、すなわち文革中に一般の人々が受けた迫害や虐待が、含まれていなかった。

欧米の学者は中国に住んでおらず、おもに中国の出版物によって状況を理解しているが、しかし実際、一般の人が受けた暴力迫害が中国人作者の本に書かれることは、大変に少なかった。すでに出版された中国語の文革通史 3 部のうち、厳加其・高皋の『文革 10 年史』（1986）だけが、一般人 2 人の受難者名を挙げている。王年一の『大動乱の時代』（1988）は、1966 年夏の学校のことを次のように記すだけだ。

「大学・中高・小学校の教師で凌辱を受けた者は何万人もいた。北京の中高や小学校の若干の教師が、陰陽頭に剃られた。」

こうした叙述では、陰陽頭に剃られたことが当時最大の暴力攻撃になってしまう。おおぜいの教育従事者が殺され怪我させられたことは避けて触れない。こうした叙述を読んでも真相は分からない。中国の作者がこのように書く原因は多いだろうが、ここでは分析しない。ここで強調したいのは、マクファーカー教授が私の研究を見た時、すぐさまそれを彼のカリキュラムに導入したことだ。彼はもともとは事実を了解していなかったし了解するすべも無かったが、しかしひとたび了解するや、即座に文革の集団暴力迫害と文革受難者のことを、文革史の授業に組み入れたのだ。

この点、筆者はマクファーカー教授の支持に感謝している。のちに筆者が当時の加害者たちの脅しに遭った時、またある学者に「こうした一般人の死を書くことに何の意義があるのか」と問われた時、教授は筆者に手紙をくれた。あなたの研究には重大な意義がある、どうか事実を追求し続けてください、と。

2. 受難者の削除は文革の美化をまねく

文革の事実を探求し、その受難者の経験を調査する。これが私が長年努力してきた仕事だ。私は千人以上の人と話をし、数百名の受難者の事件を書いてきた。私にとって、受難者の悲惨な経験は文革史の最重要部分だ。

一般論や常識から言っても、「革命」の歴史を書くのに、革命の攻撃対象を書かずしては、到底信じられ理解できるものになり得ない。同時に、歴史事件に対する評価も、受難者がいたか否かという事実から離れることはできない。ヒットラーがあれほど多くのユダヤ人を殺していなければ、またスターリンがあれほど多くのいわゆる「反革命」を銃殺していなければ、彼ら 2 人への叙述と評価はまったく違っていただろう。

文革の歴史で非常に明らかなのは、受難者がいなければ文革の罪悪と恥辱は容易に消せるし、文革史もロマン化されやすい、ということだ。以下に、海外の文革理解を 2 例挙げよう。

1996 年、香港の雑誌『二十一世紀』が、アメリカのデューク大学のアリフ・ダーリク〔Arif・Dirlic〕教授の『グローバル資本主義の視野における 2 つの文化革命』を大きく取りあげた。ダーリクは、過去 10 年間「文革（ないし全中国革命）はたえず泥を塗られてきた」とする。彼は 3 つ

の点から文革の意義を肯定する。1 つは共産革命の新たな出発点として。2 つには第三世界の社会主義の代表として。3 つには資本主義とソ連型社会主義に挑戦する政治経済の規範として。

欧米の文革支持理論はダーリク説だけではないが、類似の説の多くが文革期に生まれており、中国への理解不足に伴っている。1996 年にまだこうした説を提唱する人はかなり少なくなった。文革後は国外居住者にも、以前より事実がよく分かるようになったからだ。文革肯定のこうした理論は気宇壮大に聞こえる。ダーリク教授は、以前の見解と理論を持ちつづけている。若い学者にはこうした理論を目新しく魅力的だと思う人もいる。

けれども、文革を讃えるこうした人々は、文革の事実、とりわけ文革被害者の事実に対しては回避する態度をとる。彼らは理論を語るが、史実を語りたがらない。もし文革期の中国社会の実状を、当時の「資本主義」社会や「ソ連型社会主義」と本当に比較するならば、文革肯定の説が成り立ちがたいことは、きわめて明らかだ。彼らの堂々たる理論は事実を解釈できないから、彼らは事実に触れないのだ。

1990 年代、ヒットラーのユダヤ人殺害を当然だと正面切って言える理論家はもはやおらず、スターリンの「反革命」への処刑を正しいと言える人もいなくなったが、しかし文革については、肯定され賛美さえされている、そのおもな原因は、文革受難者の事実の絶大な部分が、記録され報告されていないからだ。

文革受難者への無視は、文革の指導者たちが自分たちの歴史を漂白するのを助けている。1996 年 4 月 10 日『ニューヨークタイムズ』が、「中央文革小組」のもとメンバーである王力への取材を、全面で発表した。「中央文革小組」は文革中もっとも有力な指導集団の 1 つで、かつて「中共中央・国務院・中央軍委」と並びたって種々の命令を発していた。記者のパトリック・タイラー（Patrick Tyler）は、王力は〔いま〕北京の「小さい」アパートに住んでいて貧しい、と書いている。王力は取材に「文革中にしたことを私は後悔していない」と話している。

1998 年、私は偶然にタイラー氏に会った。私は率直に彼に言った。あなたの報道で王力のアパートが「小さい」というのは本当です。アメリカの基準で見れば、北京のアパートはほとんどが「小さい」です。だが王力はその 2 軒分を手にいれており、一般の中国人よりは依然として特権を有し、決して気の毒ではありません。王力は「後悔していない」と言っていますが、あの報道で王力は彼らの権力圏内の衝突のことしか語っておらず、その衝突で勢力を失い長く監禁されていたという文脈のもとに、自分は無辜であり「後悔しなく」ともいい人間だと、弁じているのです。しかし現実には、彼が権力を握っていた時、北京と中国全土できわめて多くの人々が殺されたのですが、そのことには一言も触れないのです。私のファイルには、彼が 1966 年の演説で、紅衛兵の行動を支持し鼓舞しているものがいくつかあります。その年の夏、北京では数千人がむざむざ殺され、おおぜいが自殺し、10 万人が自宅から追い出されました。あらゆる学校で、幼稚園までも、教育従事者を殴打し虐待していました。火葬場には死体が積まれ、臭気に満ち、焼却が追いつきませんでした。「中央文革小組」も『簡報』を出して、何人が殺され、何軒が家捜しされたと書き連ねていましたが、その標題は「旧世界を散々に打ちのめせ――紅衛兵この半月の戦果累々」でした。このように野蛮

で残酷な事件が 3000 年の文明を有する北京市内でおこっていたのに、これに対して「後悔しない」と言えるのでしょうか。

これを聞いたタイラー氏はしばらく沈黙したのち、自分はもう北京駐在ではなく、他国に赴任しようとしている、と言った。

王力と、彼より地位の高い「中央文革小組」組長だった陳伯達は、ともに香港で文革の回想録を出版している。2 冊の共通点は、革命がもたらした痛苦と惨死を語らず、まして被害者への謝罪はなおさら語らないことだ。実際、人の苦しみと死を削除したら、是非善悪を判断するすべはない。しかもこうした著書は、受難者は廃品やゴミのようなもので、触れる必要もないという価値観を暗に含んでいる。生命への尊厳を冒涜しているから、文革中に迫害にあった人々が読むと、気分が悪くなる。だが彼らはみな一般人なので、こうしたいわゆる「文革名士」に対しては、意見を呈する機会も無い。

受難者は死人に口なし、生存者は語ることができず、歴史学者は受難者の名前や経験を記録せず、加害者はかくて大声で「私は後悔しない」とがなりたてる。

3. ジャーナリズムの「ネット文革受難者紀念園」への支持

2000 年春の「アジア研究年会」で、私はオーストラリア国立大学教授のジョナサン・アンガー（Jonathan Unger）に会った。彼は文革研究の専門家だ。妻の陳佩華も同業で、『毛主席の子供』を著し、中国語に訳されている。彼は私に「文革については私もインタヴューをして、たくさんの人と話しました。しかしあなたが書いたようなことは、私は聞いたことがありません」と言った。私の報告内容に対する彼の驚きは、私を驚かせた。もっと大きな声で私の調査と研究を伝えなければと思った。

長年私は、文革受難者の名前と事件を公表するすべを模索しつづけてきた。これは容易なことではない。彼らの名前を留める記念館もなく、彼らのための本を出版できる環境もなかった。ついに 2000 年 10 月、私はインターネット上に「文革受難者紀念園」を作り、調査で探しあてた受難者の名前と彼らの経歴、それに写真等を展示した。サイトは、www.chinese-memorial.org. だ。

サイトができると、ホームページのメールアドレスを通して多くの読者からメールが寄せられた。彼らはこのプロジェクトに賛同し、受難者の資料まで提供してくれた。遺憾ながら 17 ヶ月後の 2002 年 3 月、このサイトは北京当局によって封鎖された。けれども中国以外でなら、依然として時々刻々、文革の罪悪がもたらした生命の惨劇を 1 つ 1 つ見ることができる。

2001 年、雑誌『国家評論』の総編集長ジェイ・ノードリンガー（Jay Nordlinger）が私をインタヴューし、「彼女は革命から何を見たのか？」と題する 2 頁の文章を発表した。2002 年、『高等教育報』の女性記者ベス・マクムートリー（Beth McMurtrie）が遠路はるばる会いに来てくれて、「国家の狂気を記録する：ある時代の事件」という全面特集記事を発表した。2003 年 6 月にはハーバード大学で、ソルジェニーツィンのハーバード卒業式典講演 25 周年を記念する会議が催された。ソルジェニーツィンは『収容所群島』など多くの重要な著作を書き、ソ連時代の迫害制度をあばいて

いる。ジェイ・ノードリンガーは会議で「1978 年からの長い道のり」と題する文章を発表し、ソルジェニーツィン氏の偉大な仕事を回顧したのち、私の文革研究の意義を語りだした。予期せざるジャーナリズムの一連の報道に、私はいささか驚いた。一面識もない記者たちが私の仕事に興味をもって紹介してくれるとは、思ってもいなかった。けれどもおかげで、事実を追求し続ければ必ず聴いてくれる人がいることを知った。

今年 8 月 7 日、アメリカの国家公共テレビが、番組キャスターのジェローム・マクドネル（Jerome McDonnell）と私との談話の録音を放送した。彼と私は、文革受難者紀念園サイト設立の経過と、私のインスピレーションの来源を語った。最後に彼は、ある受難者の話をするよう私に求めた。以下は、私の語った話の中国語訳である。

卞仲耘（べんちゅううん）は、文革中に北京で紅衛兵の生徒に殺された、最初の教育従事者です。彼女は北京師範大学附属女子中高の副校長で、4 人の子供の母親でした。1966 年 8 月 5 日、紅衛兵生徒は「闘争会」を開き、卞仲耘とほかの 4 名の学校責任者を「つるしあげ」ました。彼ら 5 人は「反革命黒帮」と非難されました。彼らはみな地面に跪かせられ「罪を認め」させられました。参加する生徒はますます多くなりました。紅衛兵のある者は墨汁を彼らの身体にかけ、ある者は棍棒で殴り、ある者は熱湯でやけどさせました。3 時間の虐待のすえ、卞仲耘はグラウンドに昏倒し、ゴミ車に放置されました。2 時間後、彼女は通りの向かいの医院に送られましたが、すでに死んでいると分かりました。ほかの 4 人も重傷を負い、もう 1 人の副校長の胡志濤は骨を折られました。

卞仲耘が殺されて 2 週間後、毛沢東が天安門広場で 100 万の紅衛兵に接見しました。彼らはみな交通費も宿代も食費も免除されてやって来ました。天安門の城楼で、卞仲耘の学校の紅衛兵リーダー宋彬彬が、紅衛兵の腕章を毛沢東の袖につけました。彼女の名前が「文質彬彬」の「彬彬」だと知ると、毛は「武が必要だな」と評し、この集会は全国に実況放送されました。

毛の鼓舞によって、教師への暴力攻撃が即座に、全国のあらゆる学校に広まりました。卞仲耘の運命は多くの教育従事者の運命となりました。

卞仲運が死んでも、彼女の夫と 4 人の子供たちは、「文化大革命に反対している」と非難されるため、声を上げて泣くことさえできませんでした。1 年後、彼らは家のクローゼットに秘密の霊廟を作り、彼女の写真をクローゼットの壁に貼り、花を一輪供えました。クローゼットのドアはいつもきっちり閉められていました。夫と子供たちのほかは、誰も霊廟のことを知りませんでした。

2 年後、別の迫害運動で、卞仲耘の学校の教師が 3 名、「つるしあげ」られ監禁された後自殺しました。3 人の中の 1 人の胡秀正は化学の先生で、あとに 5 歳の 1 人娘が残されました。

文革後、卞仲耘の家族は、学校の壁にプレートをはめるか、校庭に樹を植えるかして彼女を記念したいと頼みましたが、頼みは拒絶されました。

こののち、卞仲耘の夫は裁判所に正義を求めました。彼は 9 年間訴え続けましたが何の進展もなく、裁判所は、訴追期限が過ぎているから彼の案件は成立しない、と言い渡しました。

1993 年、筆者が卞仲耘の学校に行き、彼女が殺された場所で写真を撮っていると、12 年級〔高

校３年〕の生徒が３人、なぜ私がそこにいるのか興味を持ちました。わけを話すと彼らは「校長がここで生徒に殺されたのですか？私たちは何も知らない」と言いました。

私は語り終えた。キャスターとプロデューサー、それに実習生のアシスタントは、非常に耐えがたい様子だった。スタジオが重苦しい空気に沈んだ。

このことを、私は２人の中国人の友人に話した。１人は、アメリカ人は悲惨な事件を聞いたことがないので耐えがたかったのだろう、と言った。

もう１人は、そうじゃない、と言った。彼らは報道記者だから、事件をたくさん知っている人たちだ。卞仲耘のような事件だからこそ耐えがたくなったのだ。だが文革経験者の中には、こうした事件に心が動かない人がいるかもしれず、それはその人の脳が文革で変えられてしまったからで、受難者の悲運に慣れっこになってしまい、そうした事件を記憶しなければとも、耐えがたいとも、思わないのだ、と。

実際、苦痛への感受性や歴史への道徳的評価で、個人や学者間の違いを生むものは、中国人か否かではなく、その人の価値観と考え方だ。

卞仲耘の事件に出てきた宋彬彬は、最近アメリカで作られた文革の記録映画「午前８時９時の太陽」の中で、文革への回想と見解を発表している。映画を見た人が言うには、卞仲耘の死と紅衛兵の役割に対する、この映画の描き方と解釈は、あなた〔王友琴〕が「文革受難者紀念園サイト」に書いていることとは違う、と。私はまだこの映画を見る機会を持てないでいる。この記録映画は香港ではもう上演されている。どこが違うのか、そしてどこが正しくどこが間違っているのか、具体的に指摘してくれる人がいればと思う。

4. 受難者１人１人の名前を記録するという理念

１ヶ月前に「文革受難者紀念園サイト」の読者が、ハーバード大学から手紙をくれた。

「2ヶ月前、ユダヤ人学生２人が WIDNER 図書館の前に立ち、第２次世界大戦中に殺された数百万人のユダヤ人の名前を、4、5日かけて、マイクで読みあげました。まさしく受難者を心骨に刻みつけようとするもので、罪悪には審判を受けさせるというねばりづよい努力にほかならず、ユダヤ民族に尊敬の念を抱かせました」。

去年、「911」１周年のおり、ニューヨークで行われた盛大な記念式典でも、１人１人の殉難者の名前が読みあげられた。ある中国人が文章を著し、受難者１人１人の名前を朗読する方法に、敬服と羨望の意を表明した。

１人１人の受難者の名を連ねるこうした方法は、ハワイの真珠湾記念館でも、イスラエルの大虐殺記念館でも行われている。その由来は久しい。

中国人にもこれは可能だ。ただその前にまず、受難者の名簿を作らねばならない。長い長い名簿になるから、多くの作業を要するだろう。「文革受難者紀念園サイト」はその１つの端緒だ。同じ気持ちの者が力を合わせて、名簿を完成できればと願っている。

Ⅴ　1,345,796 名の受難者の記録――ロシアの 2 枚の CD〔2004 年〕

拙著『文革受難者』には、659 人の受難者の名前と彼らの悲惨な事件が記してある。

出版前、こんなに名前が多くては読みにくいから少し削ったほうがいい、と提案された。私はふだん提案を断る人間ではないのだが、この時ばかりはきっぱりと拒絶した。さいわいにも出版人が拒絶に同意した。出版後多くの読者が、小さい字でびっしり 50 万字もある本なのに、読み出すと「止まらない」と言ってくれた。拒絶してよかったのだ、と私はほっとした。「読みやすさ」をこの本は目指してはいないが、しかし明らかに、受難者の名前と事件は読者を強く引きつけたのだ。

もう 1 つの批判は正反対だ。文革の受難者はとても多いのに、659 人しか記していないのは少なすぎませんか、と。この批判を、私は完全に肯った。いつも「そうなのです、私の調査はとても足りない、もっと多くなければ」と答えた。「あなたも手伝ってくれませんか？」と心から頼んだこともあった。調査がまったく不十分だと知っているので、この批判には反論したことがない。

今年の 3 月 25 日、ロシアが、スターリンの恐怖政治の受難者 130 万人の名前を記した 2 枚の CD を出版した。新聞でこのニュースを見て、スターリンの迫害規模の大きさや甚だしさは前から多くの本で知ってはいたけれども、あらためて深く震撼した。130 万、何と大きな数か。これは 130 万の人々であり、かつて我々と同じように存在していた命なのだ。

大学図書館のロシア語文献購入係は、私の申請どおりに CD を予約してくれた。遠いロシアの CD 製作者は、「代金は要らないが、経費に限りがあるので、速達便では送れない」と返事をくれた。何週間も後に、CD が届いた。私は CD をパソコンに入れて開いた。最初に「1345796」という数字が現れた。数字が大きすぎるので、ID か本の出版番号かと思った。しばらくしてやっと、これは新聞にあった「130 万」の受難者の数だと気づいた。CD には彼らの名前と履歴と写真が収められていた。1 人 1 人並べられており、もちろん正確に 1 の位まで至っていた。人の単位はもともと「人」だ、「万」ではない。

かくも多くの受難者のうち、44500 人は、スターリンと政治局委員たちに逮捕された人々だ。383 人の名簿には、恐怖政治の最高指導者たちの直筆の決裁と署名が残されていた。CD にはこれらの名簿と決裁の 1 頁ごとの写真があった。スターリンは赤鉛筆で、大きくぞんざいに「以上処理せよ」と書いて署名していた。彼は本当に閻魔大王として、大勢の人々を地獄に送る閻魔帳を付けることができたのだ。歴史上彼以前のいかなる統治者も、何千万人もの運命をこんな形で奪う権力は持たなかった。

政治局で決裁されるのは、かなり社会的地位のある人々だ。スターリンは長い長い名簿から 1、2 の名前をチェックして除くことがあり、たとえば Lily Brik という女性の名前を名簿から除いて、逮捕や処刑をつかさどる内務部長のエジョフに「〔これで〕マヤコフスキーの妻にはぶち当たらないよ」と言った。スターリンは名簿の人々の罪状がすべて処罰のためにでっちあげられたものと知っ

ていたので、それらには何の関心も無かったことがわかる。当時すでに死亡していたマヤコフスキーは有名な詩人で、かつて情熱的にボルシェヴィキ革命を賛美し、中国 50 年代の中高の国語教科書にもその詩が収められていた。

130 万のごく普通の人々の名前に至っては、スターリンが目を通したはずもない。スターリンにとって 130 万は、彼が部下に命じて殺させ裁判にかけ収容所送りにする、統計上の数字にすぎなかった。「私は Krasnoyask 地区の第 1 類囚人の数を 6、600 にまで高めた」というメモを、彼は書いている。当時「反革命」を逮捕し処罰する命令は、あたかも予算調書のようにタイプされており、そこで人は 2 類に分けられ、「第 1 類」は銃殺、「第 2 類」は収容所送りだった。地位が高いか、かなり特別な人々だけ、彼と政治局が直接に統御する必要があり、審査名簿を要した。スターリンの筆のもとで、1 地区の 6600 人の処刑は、同じ数の犬や猫を殺すことより容易だった。

この CD のシンボルマークは、一本の燃えるロウソクだ。記念と追憶を意味している。描線はシンプル、含意はクリアで、とてもよいデザインだ。CD には、各地の人々が建てた受難者の記念碑の写真も収められている。それらの記念碑は大きくも華麗でもないが、しかしその素朴さとささやかさが、かえって人々の真実の悲しみと心からの追憶を感じさせる。

CD の資料紹介の中に、何冊かの本の表紙がある。表紙のデザインに、有刺鉄線を画くものが多い。収容所と抑圧と監禁の象徴だ。1967 年、ロシアの作家ソルジェニーツィンが政治迫害を描いた最初の長編『収容所群島』を書き、その「後記」で次のように指摘した。今年は 2 つの記念の年だ、つまり収容所群島を作りだした革命が勝利した 50 周年と、鉄条網が発明された 100 周年との、と。まさしく鉄条網は収容所で用いられ、その収容所がかつてなく広範囲に建てられたことで、本来無関係な 2 つの周年が 1 つに結びついた。鉄条網は恐怖の歴史の象徴となった。

デジタル技術は CD の搭載能力をきわめて拡大した。1 枚の CD に搭載できる資料が非常に多くなった。私は大英百科全書の CD を買ったことがある。書棚の大英百科全書は重くぶ厚い一大セットだったが、デジタル化後は、わずか 2 枚の CD となった。そしてソ連の政治テロの受難者も、その人数の膨大さゆえに、同じく 2 枚の CD を必要とするのだ。なんと大きな人類の惨劇か。2 枚の CD は小さく軽い。だが搭載されているのはなんと重い苦しみであることか。これら多くの命は、まことにまことに重すぎる。

2 枚の CD は、ロシア人が空前の規模の政治テロに遭ったことを記録しているが、他面この CD の制作自体、人権と歴史の驚くべきプロジェクトだ。これは、ロシア人の長きにわたる努力の結果なのだ。

ソルジェニーツィンの『収容所群島』3 巻は、彼自身の経験と見聞、さらに 227 人が提供した口述と回想録と書簡を記しており、この迫害の構造と概要を画きだした。この本のために、彼は 1970 年に国外追放された。

だが、受難者を記録する努力はずっと続けられた。ある若者が特別なことをした。Dima

Yurasov は 1964 年生まれで、同い年の子供たち同様、当局が過去の政策を示さないのでスターリン時代の歴史をまったく知らなかった。彼は高校で偶然、迫害と殺戮、それにスターリン死後の「名誉回復」のことを本で知った。しかし当時はちょうど新スターリン主義がはびこり、母親でさえ彼に過去の事件を話さなかった。彼は歴史を学ぼうと志を立てた。成績はずばぬけていたが有名大学を受験せず、歴史擋案館に入り、事実の記録を調べた。その後徴兵され、書いていた歴史小説の原稿を告発されて、原稿は没収、彼は「自己批判」させられた。軍隊を離れると彼は最高裁判所の試験を受け、その職員となった。彼は、受難者の姓名・年齢・出生年月・死亡時期・民族・党派・社会背景・最後の仕事場と逮捕前の身分・逮捕と迫害の事実・名誉回復の状況、を記すカードのフォーマットを考案した。18 ヶ月のうちに 10 万枚の受難者カードを作った。それが上司に見つかり、彼は解雇された。彼はトラック運転手になった。

1987 年、作家センターの集会で、発言者たちはみな隠喩や婉曲表現で過去のことを話していた。旧世代の人々はこうした話し方に慣れており、もっとも直接的な恨みを話しても、わずかな情報さえ伝わらなかった。Dima は挫折感を味わった。散会の前、この 23 歳の若者は演台に上り、自分がしている仕事のことを語って、すでに 123000 枚の受難者カードを作った、と言った。彼は聴衆に、自分は最高裁判所所長がフルシチョフに宛てた機密文書を見たし、1953 年から 1957 年まで 60 万人が名誉回復し、1963 年から 1967 年まではさらに 612500 人が名誉回復している、と訴えた。聴衆は深く震撼した。会を主催していた老歴史学者が感激して言った。「この若者は我々よりも多くを知っている。私は彼にとても感動している」。

上記の 123000 枚の後、受難者カードは増えつづけた。2000 年には、60 万の受難者を搭載した CD が発行された。その後の努力で、この数字はさらに 2 倍に増えた。

昨年アメリカで出版された 700 頁近い『収容所：ある歴史』は、迫害制度の全体について、全面的で系統的な記述を行っている。作者の Anne Applebaum はアメリカ人で、ロシア人のように身をもって経験したのではないが、29 件のインタヴューを行い、擋案資料や発表物を含むロシア語の一次資料を大量に読破している。どの頁も複数の引用文を収め、資料の出処の注記は 49 頁、引用された文章は 300 篇を超えている。手堅く、緻密で、明晰で、筋道だった、優秀な著作だ。今年、この本がピューリッツァ賞を得たという報道を見て、私は冗談に「選考委員の中に私が居たようね」と言った。同時に、この本の基盤となったのは明らかに、ロシア人が完成させてきた大量の作業だ、ということも意識した。

「種族絶滅」「大量謀殺」、こうした言葉が 20 世紀に起こった反人類罪をあらわすのに用いられている。「種族」「大量」とはそもそもどれほどか。数百や数千ではないし、数万でもない。この 2 枚の CD が提供しているのは、134 万人以上だ。しかもこれは全受難者ではなく、裁判を経て記録された人だけだ。CD 制作者は、受難者総数はこれに 10 倍する、と言っている。彼らはなおも作業を続けている。

だれがこのプロジェクトを担っているのか？ とても小さいがボランティア精神に溢れた１グループだ、と新聞は紹介している。CD が発行されたとき彼らのスポークスマンが言った。このプロジェクトは歴史の真相を記録しスターリンの罪をあばくためであり、また社会のモラルを救うためでもあります、と。

最後の１点は、彼ら自身が模範だ、と私は思う。これは政府に支持されているプロジェクトではなく、人手も資力も豊かではなく、作業量は膨大で、作業中に接する資料は人を悲しませ傷つけるものばかりだ。長年尽力するには、内心の恐れや弱さをのりこえねばならない。強いモラルの支えだけが、それを可能にしている。

スターリン時代の事件を読むのは、毛沢東時代を経てきた人には二重の苦痛だ。ロシア人の悲惨な遭遇はもとより、迫害の規模と性質と手段、甚だしくは細部に至るまで、そっくりなことが中国でも起きたからだ。

スターリン時代に起きたことが、毛沢東時代にも起きた。中国でも、最高指導者が高級幹部や有名人士を大量に逮捕監禁せよと命令し、紅衛兵が数千の庶民を殺したことを讃える中央文書が出ており、上層部からは「群衆独裁」を進め「闘争会」を開き「牛小屋」〔監禁所〕を作る方法を指導するさまざまな指示があった。もっとも重要なのは、中国でも政治テロの受難者が何千万人もいたことで、その数はロシアにひけをとらない。

大きな違いは１つ、ロシア人が 130 万人の受難者の名前を、すでに記録していることだ。彼らは、名前が多すぎて興味を持つ人がいなくなる、とは思わなかった。彼らは努力を続けて、受難者の名誉を回復したのみならず、受難者の名前と遭遇を記録した。死者たちに名前と尊厳を取りもどそうとし、事実上それは生者の存在を肯定することでもあった。彼らがやり遂げたことは、彼ら１人１人の努力の成果だが、同時にそれは、トルストイとドストエフスキーのロシアの、偉大なヒューマニズムの伝統を、我々に見せてくれるものでもあった。

2004 年 9 月　記す

付記

この短篇を書きあげてまもなく、１人の若者が私の研究室にやって来た。ごく普通の学生で 20 歳足らず、T シャツにジーンズで、英語になまりがあった。数学系の院生で、モスクワ大学の数学学部を卒業し、シカゴに来て大学院に入っていた。彼は中国語のような英語やロシア語とまったく違う言語に興味を持ち、私の名前と電話番号を探しあてて（私は中国語教育研究室の主任をしていた）、中国語とはどのような言語なのかを語りに来たのだった。このような聡明で探求心ある学生との会話を、私はとても喜んだ。ひとしきり言語の問題を話したのち、私はあの２枚の CD を取りだした。自分のロシア語では限界があるから、いくつかの解釈を手伝ってもらいたい、と私は彼に頼んだ。ロシア人がこうした歴史をどう見ているかということも知りたかった。

彼は言った。「僕の曾祖父がちょうどこの頃殺されたと聞いています」

私は言った。「では CD で探しましょう」

CD には「捜索」機能のウィンドウがあった。彼は私のパソコンの前に坐って操作したが、ためらいながら言った。「僕、つづりを間違えたようです」。

私はちょっと考えたが、すぐ分かった。彼の言う「曾祖父」とは母かたの人で、しかも彼の母の母の父なのだ。どちらも父系社会で子供は父親の姓になるとはいえ、英語の親族呼称は、中国語が母親の父母を「外公外婆」と〔父親の父母とは別の呼称で〕呼ぶのとは違い、父かたも母かたも区別しない〔「曾祖父」とは、中国語では父かたのみを指す〕。彼が母かたの祖母の父親の姓をよく知らないのは、理解できることだった。

だが彼はすぐに探しあてた。CD の文字を見て「間違いない。この人です」。

CD には死者の居住地と職業が記されていた。彼は「この小さな地方は、僕の母かた祖母のふるさとで、同じ地名はないはずです」。彼の母かた曾祖父は、そこの鉱山の視察員だった。

私は CD の文字を読んだ。「1937 年 12 月逮捕、1938 年 2 月処刑、法律は 58 条の 2 と 4 に拠る」。

これ以上の説明は無かった。私は『収容所群島』でこの法律「58 条」を読んだことがある。いわゆる「反ソヴィエト罪」に関わる条文で、14 の項目があった。本ではその第 10 項目が「一般の反ソ宣伝罪を犯した」人に関わっており、誰に宣伝したこともなく共犯者もおらず、犯罪時に忘我状態にあった単独犯のこととされていた。

数学の院生は言った。「この人の娘が、僕の母の母で、彼女はまだ生きています」。CD の記録はだいぶ前のことだが、そんなに古い昔ではなく、今生きている人と密切に関わっている、そう彼は言いたいのだ、と私には分かった。

そこで私は、CD をコピーしてお母さんとお祖母さんにお送りしたら、と彼に提案した。

私たちはさっそくコピーにとりかかった。言っておかねばならないのは、これは CD 制作者の望みでもあることだ。この後私は別の人のためにも、2 枚の CD をコピーした。

私が受けた衝撃は少なくとも 2 つあった。1 つは、受難者の広範さと密度だ。CD の入手後、私はロシア出身の 1 人としかこのことを話していないのに、その人の母の祖父が、受難者の中に入っていた。もとより偶然だが、しかし総人口と受難者の比率を考えれば、殺戮の規模の大きさがうかがえる。2 つ目は、死刑判決が法律に依拠していることだ。ソルジェニーツィンは上記「58 条」の荒唐無稽さと残忍さ――この 1 条を犯した者は 10 年以上の懲役となる――を何度も指摘している。院生の曾祖父などは「58 条」のために死刑になったのだ。

しかし私が集めた文革中の判決文を見れば、1967 年に書かれた死刑判決書には「中華人民共和国の反革命を処罰する条例第 10 条第 3 項の規定に基づき、判決は以下の如し。反革命犯 XXX を死刑に処し、ただちに執行せよ」とあるが、1968 年に書かれた懲役 15 年の判決書には「党の政策に照らし、広大な革命群衆の強い要求に基づき、現行反革命犯 XXX を懲役 15 年に処す」とあるのみだ。1970 年の 13 人の死刑判決書に書かれているのは、「偉大なる領袖毛主席みずからの『そのとおりに処理せよ』という『一三一』の指示を全面的に実行し、断固として反革命破壊活動を鎮圧し、軍備を強め、祖国を守り、プロレタリア階級独裁を強固にするために、党の政策と広大な革命群衆の要求に基づき、……」だ。明らかに文革 3 年目から、判決書にはもはや法律の条文が引用

されていない。

しばらくしてロシア人たちは、受難者の名前を、ネットの www.memo.ru にあげた。アイコンは一本の燃えるロウソクで、意味は記念だ。彼らはまた、「記念」という名の組織も立ち上げた。彼らは受難者に関わる日記や書簡のような資料や物品を探し集めている。